

北方資料展

北海道の音楽事情



会期：平成29年1月4日(水)～2月26日(日)

場所：北海道立図書館エントランスホール

【開催にあたって】

北海道に初めて西洋音楽がやってきたのは、幕末の箱館であったと言われていました。

今回の展示では、対象を多様な音楽ジャンルの中でも洋楽の本流となるクラシック音楽に限定し、「北海道 150 年」を目前にした北海道における西洋音楽の歴史と歩みを、北方資料によって紹介します。

1 通史

北海道に初めて洋楽がやってきたのは、1854年（安政元年）の箱館でした。

その後、道内におけるクラシック音楽の歴史は幕末・明治を経て、大正・昭和と、地理的には函館から札幌へと拠点を移し、長い時間とともに発展してきました。

戦後は1961年（昭和36年）に札幌市民交響楽団が、1986年（昭和61年）に札幌コンサートホールが誕生、また1990年（平成2年）にPMF（パシフィック・ミュージック・フェスティバル）が創設されるなど、北海道における洋楽の歴史は現在に至ります。

- (1) 『北海道洋楽の歩み ～ペリー来航から札幌まで～』（前川公美夫著 北海道新聞社 1989 請求記号：762.1-MA）
- (2) 『北海道音楽史』（前川公美夫著 亜璃西社 2001 請求記号：762.1-MA）
- (3) 「黒船から札幌コンサートホール Kitara まで 北海道で西洋音楽はこう広まった」（渡邊知樹著）
※『大学的北海道ガイド ～こだわりの歩き方～』（札幌学院大学北海道の魅力向上プロジェクト編 昭和堂 2012 請求記号：210.1-D）収録（p81～107）
- (4) 「本道の音楽について」（工藤富次郎著）
※『北海道文化史考』（日本放送協会札幌中央放送局編 日本放送出版協会 1942 請求記号：210.04-NI）収録（p302～308）

2 幕末

開国を機に箱館まで足を伸ばしたペリー艦隊の一行5隻の乗員たちが、1854年（安政元年）5月26日、客死した船員のために、船上で奏でた葬送の音楽（横笛とドラムによるヘンデル作曲「サウル」の中の行進曲）が箱館の人々の耳に届きました。

3日後、ペリーは現地で応対した松前藩士を船上に招き、交歓会を行ったのですが、そこで催された minstrel・ショー（黒人に扮した芸人たちが黒人の訛りで歌ったり踊ったりするショー）の中で演奏されたのが、スティーヴン・フォスターの歌曲（「主人は冷たい土の下に」）でした。

- (1) 『函館開港と音楽 ～西洋音楽受容さきがけの地～』（函館メサイア教育コンサート実行委員会 2010 請求記号：762.1-HA）
- (2) 『幕末の北辺 第3回維新展』（霞会館 1983 請求記号：210.51-B）
※ 「米国使節ペリー饗応の図」収録（p49）
- (3) 『箱館の音 歴史を彩った箱館の音色さまざま（函館学ブックレット No.22）』（佐々木茂著 キャンパス・コンソーシアム函館・事務局 2012 請求記号：762.1-HA）

3 明治

1883年（明治16年）、陸軍軍楽隊が幌内鉄道（小樽―手宮）の全通式に演奏（曲目はポルカ）しましたが、これが道内での洋楽発表の始まりだと言われています。

やがてキリスト教教育の普及（函館：遺愛女子高校、札幌：北星学園）とともに讃美歌が学校で歌われるようになり、ピアノやヴァイオリンなど洋楽器の移入も進むようになります。

同時にこの頃（明治20年前後）には、西洋音楽の受入れの窓口が函館から札幌に移るようになります。

当時の禁酒運動を背景に健全な室内娯楽を目指して、1891年（明治24年）に札幌では北海音楽会が設立、日清戦争など出征・凱旋等に奉仕し消滅した後、映画館が生まれ始めると、1901年（明治34年）に無声映画の興行に便乗した札幌音楽隊（通称：赤帽子音楽隊）が登場します。これは北海道で初めてのプロの音楽隊で、札幌で看板屋を営んでいた原田文治郎が個人で経営していたものです。

- (1) 『札幌と音楽』（札幌市教育委員会編 北海道新聞社 1991 さっぽろ文庫57 請求記号：081.2-SA-57）p97～99（“札幌音楽隊”）
- (2) 「札幌音楽隊の発足・発展と明治末の音楽界」（前川公美夫著）
※ 『札幌の歴史 第45号』（新札幌市史編集室編 札幌市教育委員会文化資料室 2003.8）収録（p20～36）
- (3) 『北海道活動写真小史』（更科源蔵著 九島興行 1960 請求記号：778.2-SA）
- (4) 『北海道映画史』（更科源蔵著 クシマ 1970 請求記号：778.2-SA）

4 大正

北海道の開拓後、50年目の年にあたる1918年（大正7年）、札幌の中島公園を会場として「開道50年記念北海道博覧会」が開催されましたが、公園内には円形の奏楽堂が建設され、8月1日より50日間、演奏を行ったのが明治の項目で紹介した札幌音楽隊でした。

誰もが知っている「時計台の鐘」（作詞・作曲：高階哲夫、歌：村井満寿）は札幌を代表する大正期の名曲ですが、1923年（大正12年）には札幌の富貴堂楽器部が楽譜200部を出版、その後、3年後にはレコードに吹き込まれて市販され、全国に札幌の魅力を伝えることになりました。

一方で学生オーケストラも誕生するようになり、例えば北海道大学では、1922年（大正11年）に札幌シンフォニー・オーケストラが、翌年には文武会音楽学部管弦楽団が誕生したのもこの頃です。因みにこの2つのオーケストラは、その後の1941年（昭和16年）に合体し、北海道大学交響楽団が誕生することになります。

- (1) 『時計台建立80周年記念誌』（札幌図書館編 札幌市教育委員会 1960 請求記号：709.2-SA）
- (2) 『響け「時計台の鐘」』（前川公美夫著 亜璃西社 2001 請求記号：762.1-HI）
- (3) 『[[富貴堂]七十年のあゆみ 富貴堂小史』（富貴堂 1967 請求記号：335.48-F）
- (4) 「特集：北海道の音楽を語る 黎明期とその後（一）」
※『音楽新報 創刊号 第1巻第1号』（音楽新報社 1977.3）
収録（p10～30）
※札幌における大正初期の音楽事情を座談会形式で紹介

5 昭和・戦前

1928年（昭和3年）のNHK札幌放送局（札幌中島公園内）によるラジオ放送開始に伴い、番組に専属として出演していた団体である中島オーケストラ、NHK札幌放送局の音楽放送を担当したSMC（札幌ミュージシャンクラブ）オーケストラなどが誕生、その後は札幌新交響楽団の登場に続き、道内各地でも小樽や釧路などで市民オーケストラが続々誕生し、活動を続けました。

- (1)『札幌とともに半世紀 ～NHK 札幌放送局のあゆみ～』（日本放送協会札幌放送局編・刊 1984 請求記号：699.2561/NI）
- (2)「札幌放送局オーケストラ初代指揮者石井春省」（文野方佳著）
※『札幌の歴史 第18号』（新札幌市史編集室編 札幌市教育委員会文化資料室 1990.2）収録（p62～63）

<その他の市民オーケストラ>

- （札幌）札幌新交響楽団（指揮：建築家 田上義也）
- （小樽）小樽フィルハーモニック・ソサイエティー、小樽管弦楽団
- （釧路）釧路管弦楽団、釧路フィルハーモニック・アンサンブル
- （旭川）栄光弦楽団
- （帯広）音楽協会管弦学部

6 昭和・戦後

戦後の代表的な音楽活動としては、1941年（昭和16年）には北海道大学交響楽団が、1961年（昭和36年）にはプロ・アマの混合編成による札幌市民交響楽団（翌年、財団法人化とともに札幌交響楽団に改組・改称）が誕生しました。

1960年代以降はアマチュア・オーケストラの台頭も目覚ましく、1964年（昭和39年）にはHBCジュニアオーケストラ、1980年（昭和55年）には北海道交響楽団、1985年（昭和60年）にはサッポロウインドオーケストラ、1988年（昭和63年）には帯広交響楽団が登場するなど、数多の音楽活動が活発になってきました。

海外からは1966年（昭和41年）には巨匠カラヤンとベルリン・フィルハーモニー管弦楽団が7年振りに2度目の来日となりましたが、初の来道となる札幌では4月に札幌市民会館で演奏を繰り広げました（曲目はブラームスの交響曲第2番）。

1990年（平成2年）にはバーンスタインの提唱により、PMF（パシフィック・ミュージック・フェスティバル）が札幌市で開催（以後毎年開催）、1997年（平成9年）にはクラシック専用ホールである札幌コンサートホールが札幌市に誕生したのも記憶に新しいところです。

オペラについては、1953年（昭和28年）に市民団体としての札幌オペラ研究会（通称オペ研、北海道大学の音楽科がメンバーの中心）が結成され、1964年（昭和39年）には北海道二期会が誕生、道内オペラ活動の中心的役割を担うようになります。

■札幌交響楽団

- (1)『札幌交響楽団』（札幌交響楽団編 北海道新聞社 1982 請求記号：760.6-SA）
- (2)『北の“交響詩”』（札幌交響楽団編 和泉書房 1994 請求記号：760.6-SA）
- (3)『札幌交響楽団 40 年誌』（札幌交響楽団 2002 請求記号：760.6-SA）
- (4)『札幌交響楽団 50 年史』（札幌交響楽団 2011 請求記号：760.6-SA）
- (5)『札幌交響楽団 50 年史』（札幌交響楽団 2011 請求記号：CD-899）
※上記資料(4)の視聴覚資料（CD）
- (6)『北の“交響史” 札幌交響楽団・30 年の全演奏記録』（和泉書房 1994 請求記号：760.6-SA）
- (7)「舞台芸術に対する需要拡大要因の分析 ～札幌交響楽団の場合～」（小林好宏著）
※『北海道武蔵女子短期大学紀要 第 41 号』（北海道武蔵短期大学 2009.3）収録（p1～23）
- (8)「札幌交響楽団と北海道の音楽的背景 ～NO SMOKING のサインは消えたけれど～」（谷口静司著）
※『音楽芸術 第 33 巻第 3 巻』（日本音楽雑誌 1975.3）収録（p28～31）

■北海道大学交響楽団

- (1)『北海道大学交響楽団 50 年史 1921～1971』（北海道大学交響楽団 1971 請求記号：760.6-HO）
- (2)『北海道交響楽団 15 周年記念資料集』（北海道交響楽団 1998 請求記号：764.31-HO）
- (3)『北大交響楽団』（北海道テレビ 1988 HTBまめほん 50 請求記号：081-HT-50）
- (4)「オーケストラの協同的表現活動と合奏の構造（1）、（2）～学生オーケストラ・北大交響楽団の分析～」（佐藤公治著）
※『北海道大学大学院教育学研究科紀要（第 87 号、91 号）』（北海道大学大学院教育学研究科 2002.12、2003.12）収録（p1～65、p181～254）

■その他のオーケストラ

- (1) 『帯響 帯広交響楽団創立 20 周年記念誌』（帯広交響楽団 2008 請求記号：760.6-0）
※帯広・十勝の音楽文化発展に寄与するため創立された市民オーケストラ
- (2) 『HBC ジュニアオーケストラ 40 年のあゆみ ～ひたむきにひたすらにオーケストラの青春～』（北海道放送 2006 請求記号：760.67-HB）
※1964 年、北海道の青少年に「夢と微笑み」を与える活動を目指して創立、北海道放送が援助
- (3) 「子どもにクラシックを 苫小牧ジュニアオーケストラ 富岡萬の挑戦」
※『ヘカッチ 5』（北海道子どもの文化研究同人「ヘカッチ」の会 2000.10）収録（p36～41）
- (4) 『サッポロウインドオーケストラ定期演奏会 第 22 回、第 25 回、第 26 回』（サッポロウインドオーケストラ 2012、2015、2016 請求記号：P764.6-SA-22、25、26）

■オペラ

- ・『北海道におけるオペラ活動史 ～地域の市民オペラが生み出すもの～』（北海道文化財団編集・刊 2002 請求記号：766.1-HO）

■札幌コンサートホール

- ・『札幌コンサートホール開館記念誌』（札幌コンサートホール 1997 請求記号：760.67-SA）
※1997 年 7 月に札幌市民の憩いの場所である中島公園に誕生、1995 年に一般公募によりこのホールの愛称「Kitara」が選ばれた

■音楽祭

- (1) 『PMF10 周年記念誌』（パシフィック・ミュージック・フェスティバル 組織委員会 1999 請求記号：760.67-P）
- (2) 『奇跡の音楽祭札幌・PMF の夏 Pacific Music Festival Sapporo』（谷口雅春著 北海道新聞社 2005 請求記号：760.69-KI）

—北方資料展—

北海道の音楽事情

発行日 平成 29年1月

編集 北海道立図書館北方資料室

発行 北海道立図書館

〒 069-0834 江別市文京台東町 41 番地

TEL 011-386-8521

<http://www.library.pref.hokkaido.jp/>

